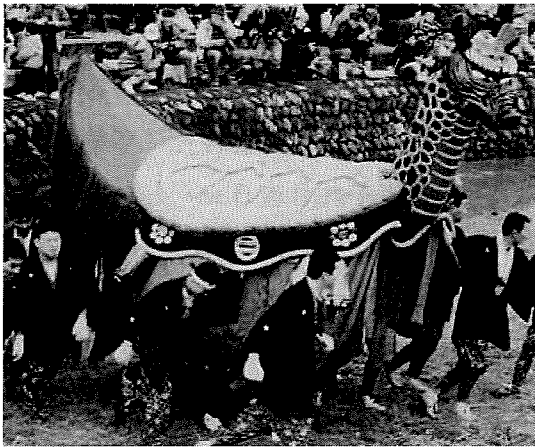
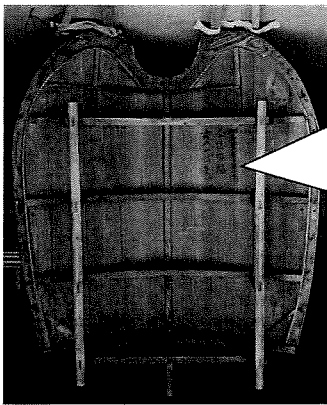


八代のガメ



幕などを外した状態⇒
頭・胴・尾で構成されています。
基本的な構造は、原田のガメも同じです。

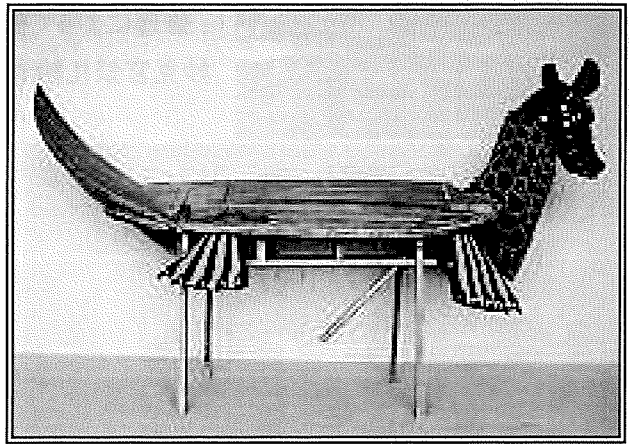


昭和十五年十一月一日
大工 結城 傳
世話人 山根寛一

胴の裏には制作者が記されています。

亀と蛇が合体した亀蛇は、「ガメ」の愛称で親しまれている妙見祭の人気者で、妙見の神さまが亀蛇に乗って海を渡ってこられたという伝説を元にして作られました。

亀蛇が妙見祭の行列に加わるようになったのは、今から300年以上前の天和・貞享頃（江戸時代・1680年代頃）と考えられています。



頭と目

以前は出発前に目を入れていたそうです。

ここにもいるガメ



河江神社の祭りに出るガメ＝



≠小川阿蘇神社の祭りに出るガメ
首が長〜く伸びます。



原田のガメ

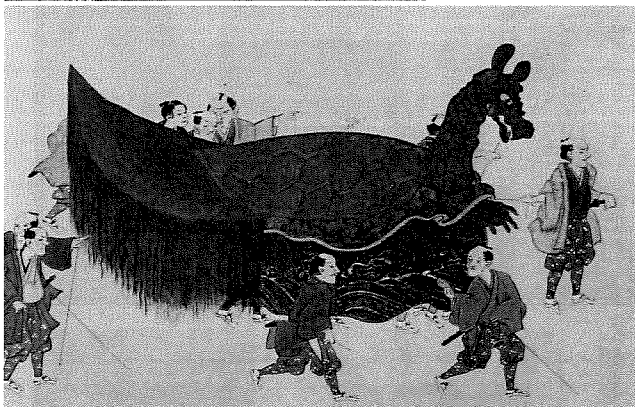
八代郡の宮原三神宮例祭に出る亀蛇で、「はっだんガメ」と呼ばれています。三神宮の例祭には獅子や奴も出て、妙見祭の影響がうかがわれます。

このガメは、もともと小川阿蘇神社の例祭に出ていたものを、原田の人が明治時代に譲り受けたものです。

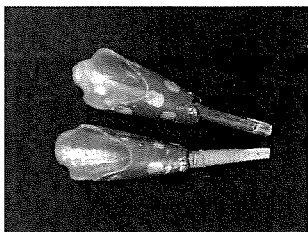
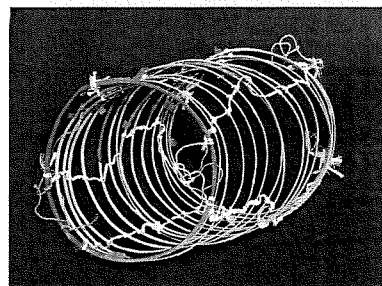
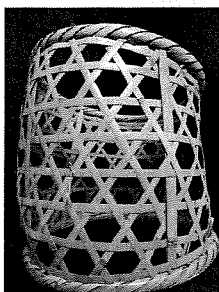
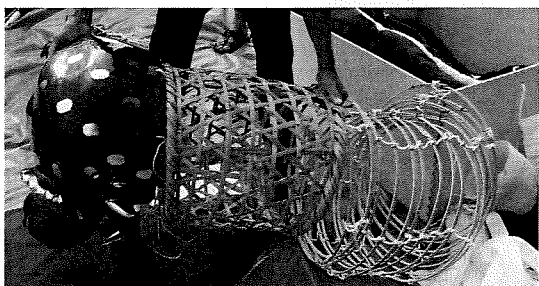


昭和55年の大修理の際、ガメの胴巻から小川阿蘇神社に奉納されたのぼりばた幟旗が出てきました。そこには「文化庚午九月吉日・・・」とあり、文化7年(1810)には小川町にガメが存在したことがわかります。その後、小川町では疫病が流行し、ガメを手放したためではないかと、返却を求めましたが、かなわず、新しいガメを作りなおしました。

修理によって部分的に作り変えられたところはあるかと思われませんが、妙見宮祭礼絵巻に描かれたガメによく似ていることに驚かされます。

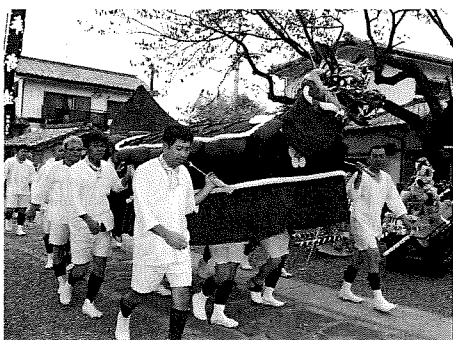


ガメの元祖は八代のガメですが、約200年前の絵巻に描かれた八代妙見祭のガメにいちばん近い外観を持つのが原田のガメです。



耳は頭に差し込むようになっていて、首は長く伸びるようになっています。

幕の裏には、端午の節供の幟旗が使われています。⇒



←足の穴の部分に注連縄をつけて警固の人たちの持ち手にします。